

---

# 紅に沈んだ言葉

密 麻容

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅に沈んだ言葉

### 【Nコード】

N8879C

### 【作者名】

密 麻容

### 【あらすじ】

僕はクラスで一番目立たなかった。それなのに、突然クラスで人気者の二人に「友達になろう」と誘われた。その日から始まった『事件』。クラス内で悪意が連鎖していき、辿り着いたのは知りたくなかった現実だった。

## 1・クラスメイトから友達へ

瞼に唇が掠めたのを感じて、目を開けた。

思ったとおり、目を閉じる前に見た教室の天井だけが視界に入った。しかし、寝る前には点いていなかった蛍光灯が煌々と目に痛いほど輝いていたのが違っていている。僕は寝ていたわけだから、誰かが点けていったのだろう。体勢を変えようと、ゆっくり身体を反転させてうつ伏せになった。途端に状況がわからなくなった。

視界に入るのは赤一色で、まるで血の中にいるような錯覚を起した。赤に取り囲まれている。

「花卉……」

近くで見れば、赤いモノの正体は花卉であることがわかった。しかし、花の種類は知識にはなかった。何の花なのか、検討もつかない。

加えて、何故花卉が辺りを覆っているのかわからなかった。眠るまでは、ただの教室の床だった。今わかることは、瞼を掠めたのは花卉だということだけだ。

「起きた？ 眠り姫」

発声の練習を受けたような明瞭な声は女性のもので、それは背後から聞こえた。すぐにその声の人物が推測され、無意識に溜息を吐いた。彼女を知らない者はこのクラスにいない。そして、この場にいるということは、この状況を作り出したのは彼女ということになる。

「僕は姫じゃないよ。君の方が姫みたいな顔してるくせに」

皮肉で言ったのに、後ろに立つ人物はくすくすと楽しそうに笑った。仕方なく体を起こし、後ろを振り返って向き合う形になると状況がわかったが、それは一層混乱させた。

姫みたいに整った容姿を持つ諏訪小百合は一面に広がる赤の中、腕を組んで姿勢よく立っていた。そして、その隣には当然のように

周防智哉が箒を持って床を掃いている。女王と従者を思わせるその構図は、最近になって見かけるようになったものだ。二人はこれにて仲が良い。ちらりと視線を下に向けると、周防が掃いた部分には床が見えている。

訳が判らないままその様子を見てみると、周防は顔を上げた。可愛い部類に入る整った容姿は無表情で、床を掃く手を休めることはなかった。

「説明がいる？ 須賀由宇」

「フルネームで呼ばないでくれる。で、これは何」  
「秘密」

ふつと嫌味に口元を上げた周防は、興味が無くなったかのように視線を下へと遣った。

じゃあ言うなよ。その言葉を飲み込んだ。言っただころでそれは意味を持たない。今できることは全然手伝う気のない諏訪に構わず、周防に手を貸すことだけだった。この赤は嫌な気分になる。血を連想したこともあるが、不吉な感じがして本能がそれを拒んだ。

仕方なく立ち上がり、教室の隅に備え付けられている掃除用具入れから箒を取り出した。床で寝ていたため、身体は固まっただけで動き難い。気合を入れる意味も込めて両肩を回した。

諏訪はそれに満足そうに頷き、側にあつた椅子に座った。本当に手伝わないうもりのようだ。この状況に耐えられるなら、手伝う必要はなかった。明日にでもなれば、不快に思う誰かが片付けるだろう。しかし、その場合疑われるのは僕だ。最後に残っていたのをクラスメイトに見られていた。その理由がなくても、僕自身が不快に思う誰かの一人なのだから、片付けないわけにはいかなかった。

机は授業が終わったままほぼ等間隔に並べてあるため、掃きにくい。何度も机と椅子の足に箒が当たる。それを気にする風もなく、周防は黙々と掃いていた。元々器用なのか、机や椅子に軽く当たるだけで綺麗に掃いていく。その様子を暫く見ていたが、ふとこの状況の不自然さに気付いた。

何故、ここに二人がいるのか。

「もしかして、僕が起きるのを待っていた？ 友情とかじゃないよね」

諏訪と周防とは友達と言えるほど付き合いはなく、ただのクラスメイトだった。まだこのクラスで友達といえるほどの人はいない。今は必要なかった。しかし、クラスでは僕と二人は何故か同じところに位置付けられていた。名字が『す』で始まるという共通点が大きいが、協調性がないという意味でも似ている。しかし、僕は二人とは全く違うと思っていた。特に特徴のない顔の自分に比べ、二人の容姿は明らかに人目を惹くものだった。だからこそ、同じ位置付けであっても二人とは関わりを持とうとは思わなかった。劣等感はないと思うが、絶対には言い切れない。人と比べられるのも面倒だし、クラス外では当然のように同列に扱われていない。

そんな葛藤を知ってか知らずか、諏訪は綺麗に笑みを浮かべた。意識しての笑みに惹かれるものはなかった。

「友情だと思っていいい？ それでいいなら、由宇って呼ばせてもらうけど。もちろん私は小百合って呼んでね。あと、起きるのを待っていたのは正解よ」

「……どうぞ」

友達になるのに断る理由がなかった。ただそれだけだった。それなのに、諏訪もとい小百合は嬉しそうに表情を緩めた。綺麗を意識した笑みではない自然の表情は、思わず目を奪われるものだった。それはただの美的感覚が反応しただけだ。恋愛感情では決してない。「僕も入れてくれる？」

「君が希望するなら。で、起きるのを待っていた理由は？」

智哉も同意を得たのが嬉しかったのか、嫌味を全く含んでいない笑みを微かに浮かべた。智哉の無表情以外の顔を見たことがなかった。さつきみたいな嫌味な感じの笑顔は何度か見たことがあるが、この表情は反則だ。クラスで人気一位二位を争う二人にこんな表情をされたら、こちらまで伝染するに決まっている。自分では確認で

きないが、きつと仕方ない、とても言うような困った笑顔をしているだろう。小百合は笑顔を苦笑に変え、智哉は顔を少し顰めて手前に出した。智哉が差し出した手に意味を取り違えることなく箸を渡し、大体掃き終わった床に残った花弁を手で摘んでいった。机と椅子の隙間は箸が届かない。

少し離れたところから、小百合の声が聞こえた。

「これから起こることに関わって欲しいの」

## 2・そして事件へ

「これから起こること……未来のことなのにはわかるんだ？」

「今だから、ね。もちろん智哉も関係することよ」

未来のことが確定しているかのように話す小百合は自信満々で、間違っている可能性を考えていないようだった。それほどまでに、決まりきったことなのだろうか。智哉も特に意見はないようで、納得していることがわかった。少し疎外感がある。二人は何かを知っている。

その思考を振り切るように花弁を全てゴミ箱に入れた。教室は元に戻った。寝る前の教室の姿だ。今更だが、教室の床で寝ていたことについて二人は何も訊かない。訊かれても困るのだけれど、全く関心がないことを示しているようで憂鬱になる。そう、二人とは質が違う。本当は同じ位置になんていない。

「関わるってどうやって？」

「自然と巻き込まれるよ。嫌でも」

智哉は掃除用具入れの扉を静かに閉めた。先程の問いだけではわからなかった声が耳に留まった。抑揚のない声は顔に合ったもので、少し高めなところも想像を裏切らない。

それよりも、普段よりも表情が柔らかい二人にどうしていいかわからなかった。何が二人をそうさせているのかわからないから、余計に混乱する。いつもはその容姿で人を遠ざけながら一種の拒絶する空気を纏っていた。それを緩和させているところなど見たことない。それが今、ピンと張り詰めた何かが切れたかのように空気が穏やかだった。

本当に、どこかが切れたようだった。

「面倒よね、ホント。余計なことをしてくれたわね、あのカマキリ」  
「カマキリだから仕方ないよ。これを利用するのもいいしね」

こんな二人も見なかったことなかった。棘のある会話を当人は気にする

ことなく続けている。カマキリというのは生物の男教師で、顔がどこことなくカマキリに似ていることから安直に付けられたあだ名だった。他の生徒と同じようにその俗称を使うような人ではないと思っていた。しかし、目の前で二人はくすくすと無邪気な顔で、楽しそうに笑って悪口を言っている。

別にシヨックは受けていないけど、僕の前でこの姿を見せるのは何故なんだ。

「藤田先生が関係してるわけ？」

「さすが由宇ね。そう、カマキリが種を蒔いたの」

小百合は宣言したとおり、僕を名前で呼んだ。先に許可を求められていたので、自然と受け入れられた。その言葉の中で引つ掛かったのは、一つの単語だけだった。

種。生物の教師だからといって今の会話に植物の話はなかった。邪に動物のモノだとも考えても繋がりはない。では、種とはなんなのか。植物の種ではないのなら、言葉遊びの類か。

「話のタネ、とか」

「うーわビンゴ。何でわかるかな」

当たっていたらしい。しかし、藤田先生の話の中で、『種』に当たるものはなかったような気がする。思い返してみても、引つ掛かるものはない。…多分。

何故か感心している小百合は何度も頷き、側に置いてあった鞆を手にとった。

「まあ、本質はこれからわかるわよ。さ、帰りましょ」

小百合は後をついてくることを確信した足取りで教室を出て行った。あの自信はどこから来るのだろう。いや、実際後については行くんだけど。

智哉も当然のようにリュックを背負った。そういえば、智哉は小百合とは楽しそうに話していたが、僕には意味深なことを言っただけだった。元から無口な方であるのは知っているが、それでも極端だと思う。別に無理に話せとは言わないけど。

少し考え込んでいたようで、廊下から小百合の急かす声が聞こえた。僕がいなくても智哉がいるならいいじゃないか。そう思って顔を上げると、教室と廊下の境目で待つ智哉の姿が目に入った。もしかしくなくても、待っていてくれていたのだろうか。

「……智哉？」

「何」

迷いながらも呼んだ名前に、智哉は反応した。無表情であるのは変わりないが、しっかりと目は向けられている。男子にしては大きい目は続く言葉を待っているようだったが、何かを言うために声をかけたわけではないから続く言葉なんてない。

何を言えればいいんだ。

「えっと、待っててくれた？ 僕のこと嫌いじゃないんだ？」

「何で嫌いになるのさ。友達だって言っただけなのに」

心底不思議そうに眉を寄せて首を傾げる智哉に慌てて「ゴメン」と謝った。疑うのは失礼だ。小百合も智哉も友達と言っただけなのに信じないのは裏切り以外の何物でもない。釣り合わないことはわかっているが、二人の気持ちを無視することなんてできなかった。急いで智哉の横に並ぶと、智哉は無表情の中にふっと微かに口元を緩めた。

だから、その反応は何。

「僕が由宇のことを嫌いだと思ったのは何で？」

智哉はさらりと僕を名前で呼んだ。前から呼んでいたように、何の違和感もなく。自然で、それが当然かのように。小百合からは事前準備があつたから良かったが、智哉から呼ばれるとは思っていなかった。すぐに言葉が出なかった。

今日、クラスの中で特別に位置する二人に名前と呼ばれてしまった。

「えっ……全然話さなかったから。小百合とは仲良く話していたのになーと」

「……変に鈍い」

鈍いつて何が。智哉は呆れたように溜息を吐くと、小百合を追いかけるように廊下を進んで行った。それに遅れないように早足でついて行きながらも、先程の言葉が頭の中をぐるぐると回っていた。呆れられるようなことを言った覚えなんてない。一人で考えるより訊いた方が早い。智哉に声をかけようと口を開いたと同時に、廊下に叫び声が響いた。

女性の金切り声が尾を引く。

「どこから!?!」

「プールの近くよ」

### 3・魔方陣

小百合は僕と智哉の間を通り過ぎ、玄関とは反対方向に走って行った。それに間髪入れずに続いた。

小百合がプールの近くだと言っただからそうなのだろう。あの確信を持った声は確実だ。しかし、何が起こったのか。ホラー映画でしか聞いたことのない叫び声は、恐怖を感じているのが嫌でもわかった。小百合は迷うことなくプールに向かって走っていた。

体育館とプールを繋ぐ渡り廊下に続く道へと角を曲がったところで、それは視界に入った。

コンクリートの上には赤いペンキのようなもので円状の何かが描かれていて、その中心に生徒が二人いた。ガタガタと震える女生徒と、それを支えるように肩を抱いている男子生徒。よく見ると、二人はクラスメイトだった。

「真弓くん、何があつたの？」

「僕もさつき着いたところです。叫び声を聞いて走ってきたら、佐藤さんがここで倒れていたんです」

クラスメイトの真弓夏目はいつもと変わりなく丁寧に話した。冷静に見えるが、この状況で冷静でいられるわけがない。佐藤真美の肩に添えられた手が震えているのは佐藤の震えだけではないだろう。段々と人が集まり始め、辺りは騒然をした。まずここで優先するべきことは、保健室へと佐藤を運ぶことだ。

「真弓くん、佐藤さんを保健室へ。根岸さんもついて行ってあげて」  
小百合は判断を間違っことなく指示した。声を聞いて集まった人だかりの中に佐藤の友人の根岸裕子を見つけ、付き添うように言ったもの的確だ。

真弓と佐藤が離れたため、コンクリートに描かれたモノがはつきりとわかった。印象だけで言えば、禍々しいとは言えない。明らかな悪意に吐き気がした。思わず口元を押さえる。赤いペンキのよ

うなもので描かれた円状の中には星のような形があり、文字らしきものが見て取れた。

「これは…」

「魔法陣」

数学の『魔法陣』でないことは、この状況を考えればわかる。しかし、小百合の口から漏れた言葉は現実からかけ離れていた。魔法ファンタジーでしかないものだ。智哉は小百合に同意して頷き、コンクリートに片膝を着いて赤い液を人差し指で掬った。

「血だ」

その言葉に周りで様子を見ていた生徒達はどよめいた。変に低い、小さな声で囁く声が耳に煩わしい。小百合はただ「そうね」とだけ返し、図形を検分し始めた。小百合と智哉は平然としているが、僕は目を逸らしたかった。気持ち悪いのは血ではない。この状況だ。

血だと言われてみれば、その色からして納得できた。鮮やかな赤は静脈からの出血だったか、と曖昧な知識が脳裏に浮かぶ。そして、確かに鼻を掠める臭いは生臭かった。

生臭い？ 人の血ってこんな臭いだった？

「人の血じゃない…魚？」

「その辺りね。鶏かもしれない。ただ、これは人の血じゃないことは確かだね」

小百合は満足したのか、人垣を割って現場から離れた。智哉も小百合の後に続き、僕は智哉に袖を引かれてついていった。集まった生徒は状況が理解できないようで、ただ立ちすくんでいた。情報処理が上手くできないようだった。僕が向こうの立場なら、きっとそうなっている。女生徒の悲鳴。佐藤と真弓。奇妙な図形の『魔法陣』。何かがわかっていような小百合と智哉。何故か二人と一緒にいる僕。これをどう整理すれば、理解できるようになるのか検討もつかなかった。

智哉に袖を引かれながら、当初の目的のとおり、靴箱へと辿り着いた。何もなかったかのように先に着いて靴を履き替えた小百合は、

固い表情で振り返った。

「早かったわね」

「そうだね」

智哉も靴を履き替えて爪先をトンツと蹴った。二人だけでわかっている。何が、とはもう訊かなかった。二人は違う事前情報を持っている。それがわからない限り、二人の会話にある隠された主語は見つけられない。今はただ、あるだけの情報を整理することに専念した。

何も言わずに帰る準備をした僕を見て、小百合は口の端を上げた。「種が発芽したのが予想より早かったってこと。それよりも由宇、さすがね。私が言わなかったら、私が言ったことを全部言うつもりだったでしょ」

本当に何故わかるのだろう。確かに、誰も言わないのなら指示しようと思っていたことは小百合が言ったことと同じだ。野次馬が集まって来てからでは遅い。しかし、僕が言って従ってくれるかが問題だった。だから、小百合が言うてくれたことにほっとしていた。指示は命令に似ている。そこには従おうという意思の形成が前提だった。小百合なら、皆が従おうとするだろう。それくらいの影響力を持っている。

何でもお見通しのような小百合はにっこりと笑い、その後にはすぐ顔を引き締めた。

「あの魔法陣、悪意を感じたわ」

「加えて血。呪いのつもりでやったんだろうね」

あの禍々しい図形は『呪い』と言われれば、それが一番適当だった。血で描かれたそれは悪意以外の何も感じられず、強い思いが伝わってきた。

その中心で倒れていた佐藤。なぜあんなところにいたのか。制服は人ではない何かの血で塗れ、まるで佐藤自身が血を流しているようだった。身体は傷付いていないのかもしれないが、震えていた佐藤は内面で傷付いているに違いない。

「小百合、何故そんなに詳しい？」

「ただの趣味よ。一時ブームになってたときに釣られてね。魔法陣とかの本は結構見かけるし」

それだけでこんなに詳しくなれるわけない。しかし、本当の理由を聞こうとは思わなかった。その類のことに詳しくなるほどの何かがあつたことは容易に想像できる。

魔法。どこかで聞いた単語だと思っていたが、思い出した。今年の今頃、陰陽師などの不思議な力のようなものが流行っていた。そのとき、小百合は一部の女子から陰湿ないじめのようなものを受けていた。それを知ったのは偶然だったが、そのとき小百合は屈することなく悠然としていた。紛い物の呪術には正論で対抗していたのを思い出し、納得した。

今回の出来事は、小百合が一番理解できるだろう。

#### 4・真弓夏目

「あつ真弓くんだ」

靴を履き替えて帰ろうとしたところに、真弓が保健室から出てきたのを小百合は見つけた。保健室は靴箱の隣にあり、その隣に職員室がある。職員にとっては親切な配置で、保健室にとっては玄関に近いのは緊急事態に対応できる絶妙な位置だった。

真弓は小百合の声に気付き、疲れた笑みを見せた。しつかりとした足取りで歩いてくるが、それは気を張り詰めていないとすぐに崩れそうだった。そう、見えた。

「お疲れ様、真弓。大丈夫？」

「…須賀くん。僕は大丈夫です。ただ、佐藤さんが怯えてしまつて」  
ちらりと保健室に視線を遣つた真弓は溜息を吐いた。自分の無力を感じているように見えた。真弓が悪いわけではない。それなのにただのクラスメイトを心配する。そんな真弓は想像していたとおりの人物だった。

想像を悉く壊してくれる二人とは正反対だ。

「真弓くん、何があつたか教えてくれる？」

僕の前とは違う、いつもの大人しい感じで小百合は訊いた。真弓はその演技に気付いているのかいないのか、微塵も感じさせないで答えた。

「佐藤さんは誰かに呼び出されてあの場所に向かつたそうです。そして、角を曲がつたところで背中を押されて倒れこみ、それがあの円の中だった、と」

「それじゃ、怯えるのも仕方ないわね…素人でもアレが何なのかはわかつてしまうもの。真弓くん、アレは何だと思つた？」

「呪い、だと思いました」

小百合は静かに頷いた。直接あの赤い液体に触れてしまつた真弓なら、あの液の正体はわかつているはずだ。生臭さはそのまま、邪

悪さに転換する。佐藤は誰かに呪われているという妙な確信が沸き起こった。

それじゃ、相手の思う壺だ。

「真弓、あれは魔法陣だ。なら、その効果は呪いだけじゃないはず。君が思考を偏らせることはないと思うけど、第一発見者の君が偏見を持たないようにしてほしい。独りで責任を負おうとしないように」  
「……そうですね。須賀くん、心配しないでください。僕は打たれ強いんですよ」

打たれ強いというのはただの我慢だ。痛いには変わらない。真弓も佐藤同様被害者だ。そんな真弓に忠告だけは厳しく言ったが、真弓の心配をかけさせないように配慮する言葉に力を抜いた。

打たれ強い。そんな真弓も小百合のように、強さの後ろに何かを隠しているように感じた。

「僕は真弓を心配したいんだよ。君が迷惑でも」

「有難う御座います」

ふっと少し安心した笑みを浮かべた真弓にそれ以上言うことはなく、横で遣り取りと見ていた小百合と智哉に目を向けた。

小百合は優しい笑顔をしていて、智哉は困った笑みを作っていた。

「もう用は済んだよね。さよなら、真弓くん」

智哉は笑みを一瞬にして消し、別れの挨拶を投げた。その智哉に何か思うところがあったのか、真弓は面白そうに口元を緩めていた。真弓の気が紛れて表情に余裕ができたのは良いが、何故そうなったのかわからない。智哉の何が真弓に影響を与えたのか。

わからないことだらけだ。

「一つだけ教えてくれないかな」

「何ですか？」

「すぐにあの場所がわかった？ 小百合はすぐにわかったみたいだけど」

素朴な疑問に、真弓と小百合は苦笑で答えた。変な質問だったか、と考えてみても可笑しなところはないと思う。場所を特定できるほ

ど、あの叫び声に何か含まれていたのだろうか。

「知っている人にはわかるんですよ。あの場所からの声は」

「体育館とプールの間だから、変な響き方がするのよ。人気がないしね。まあ、たまに放送部とかが発声練習に使っていたりするから、その響きを聞いたことがあればわかるはずよ」

あつさりと謎解きは終わった。まあ、由宇ならわからないかもねーと小百合が付け加えたのに、真弓は笑顔で頷いた。僕ならわからない、というのが引つ掛かった。帰ろうとしていた智哉も困ったような表情で口元を緩めていた。あの場所は何度も言ったことがある。遠くから聞かないとわからないということか。

「須賀くん、諏訪さんと周防くんと仲良くなったのですか？」

「友達になった。ん？ 真弓も僕と仲良くなりたい？ あー小百合達の方かな」

名前で呼び合っていたのに気付いたのか、真弓は鋭く指摘した。

それは小百合の誘いの言葉に似ていて、鎌をかけてみた。僕と仲良くなりたいのではなく、小百合と智哉と交友関係を築きたいだけなのかもしれないけど。

その問いに、真弓は楽しそうに笑った。

「仲良くなるのは喜んでお願いします。ただ、何故今を選んで友達になったのかと思ひまして」

「今だから、よ」

小百合は事も無げに答えた。それは明確で、真弓には間違いなく意味は伝わったようだった。ということとは、真弓も小百合と智哉に見えている未来像を少しは知っているということになる。今、この時点は何かを変えるのに適しているというのは、何を暗示しているのか。

結局答えは出なかった。

「さようなら、周防くん。有難う御座いました、諏訪さん。また明日、須賀くん」

真弓の挨拶はそれぞれに違っていた。違いは微妙だが、少しだけ

差を感じた。それを感じ取ったのか、智哉は悔しそうに顔を顰め、その智哉の反応と真弓の機転の良さに小百合は含み笑いをしていた。とりあえず、真弓に「じゃあ、また明日」とだけ返して先に歩き出した智哉の後を追った。初めとは逆に、小百合はゆっくりと後ろを歩いた。

何かが着実に変わってきている。それは前進なのか後退なのか。その答えを知るのが今は怖かった。それは高揚感を伴うスリルのようなものだった。

## 5・また明日

「あれ、こっち方面だっけ？」

学校を出てから二十分は経っている。普通に話していて時間に気が回らなかったが、駅を通り過ぎていた。確か二人は電車通学だったはずだ。僕の家は駅を少し越えたところで、駅からは徒歩で十分ほどだった。片道三十分の通学で自転車ではなく徒歩通学なのは、ただの健康のためだ。

小百合と智哉は今更、という顔をした。

気付くの遅くて悪かったな。

「んー純粹な由宇くんを送って行こうかなーと」

「純粹って何。それって言い換えると馬鹿ってことになるけど」

「馬鹿じゃ意味が違う。送られるのは嫌？」

窺うように首を傾げて上目遣いに見る智哉に頭痛がしそうだった。ただでさえ可愛い顔なのに、それを意識しての仕種は一層智哉の容姿を強調させた。思わず頭を抱える。

助けを求めるように小百合を見ると、小百合はわかったとでも言うように智哉の耳に何かを囁いた。途端に智哉はふつと息を吐いていつもの無表情に戻した。

だから何があったんだ。二人が僕のわからないところで理解し合っている。そして、真弓も何かがわかつている。…もしかしなくても、仲間外れにされている。いや、智哉が言ったことを今は信じよう。「送られるのは嫌じゃないけど、君たちが遠回りになるのが気が引けるだけ」

「これは私たちの自己満足よ。帰るときくらい長くいたいなって。友達になっただけだしね」

真弓の前での大人しさは消え、小百合は快活になっていた。生き生きしているのは見ている方も気分が良い。楽しそうにしているところを申し訳ないのだけど、足を止めた。同じように二人も止まっ

た。

「ここが僕の家。今日は突然だから帰ってもらうけど、事前に言ってくれば用意しておくから、上がって行って」

家はきちんと掃除してある。しかし、客を迎える用意はできていなかった。家に上げるのだから、茶菓子の用意くらいはしておきたい。それくらいのもてなしは弁えている。

二人は驚いたように顔を見合わせ、くすくすと笑い始めた。その様子は教室での悪巧みに似ていたが、表情が違っていた。僕の前での振舞いだけは演技をしていないようで、誤解しそうになる。

僕は君たちにとって特別なのか？

「うん、じゃあまた上がらせてもらうよ。明日は昼食の用意をしないで来てね。また明日、由宇」

「じゃあねー」

ひらひらと手を振る二人に手を振り返した。放課後、教室で目が覚めてから二時間も経っていない。それなのに展開は速かった。

これが藤田先生の蒔いた種の影響か。発芽が早かったというのも関係しているのだろう。智哉が「巻き込まれる」といつていたのが気になった。もう巻き込まれているのか、それともこれからなのか。玄関の扉がいつもより重く感じた。

## 6・事件とクラスメイトと

次の日、佐藤は三時間目に登校してきた。顔色は悪く、昨日のことを引きずっていることがわかる。クラスの大半は、すでに朝に担任から昨日の出来事を聞いたため、佐藤に不謹慎ながらも好奇心を含んだ視線を向けていた。

少しは遠慮しろよ。担任の説明は端的だったが、端折りすぎて興味を誘うのに充分だった。「昨日、誰かが呪いの真似事をしたようです。皆さん、くれぐれも真似しないでください」なんて、噂になるに決まっている。実際その場に駆けつけたクラスメイトが、事の詳細を得意そうに話していた。「あれ、魚の血だったんだってさ」という情報だけは初耳だった。

嫌な感じだ。それに佐藤が加わって空気が澱んだようだった。感染するような気がする。

こういうのは昔から嫌だった。こそそと集まって悪口を言う。自分は仲間に入っているから対象になる心配はない。そして、みんなが言っているから自分は悪くない。そんな悪循環が生まれていく、集合体。

だから、あまり関わり合いたくなかったから、協調性なんて持たなかった。佐藤に不躰な質問をしている声が聞こえた。

「お前、誰かに恨まれてんのかよ？」

ハハハ、と乾いた笑いが辺りを包む。何故それを言うんだ。佐藤は肩を震わせていた。ここからは見えないが、泣いているのかもしれない。それを庇うように根岸が佐藤の肩を抱いた。

「そんなはずないじゃない！ 真美は恨まれるような子じゃない！」それは違う。人は知らない内に恨みを買っていることもある。それは庇うことにはならない。

教室の中は、佐藤に同情するだけでなく、佐藤に非があったのではないかと疑う者もいるようだった。ヒソヒソと交わされる会話は、

佐藤にも聞こえているはずだ。聞こえるように言っている可能性もある。

何故、誰もそれが『呪い』ではないのではないかと言えないんだ。  
「あれは『呪い』じゃないのかもしれない」

教室の中はしんと静まった。佐藤は振り返り、希望を見出したように見えた。

僕の言葉は意外だったらしく、少なからず衝撃を与えたようだった。少し考えればわかることなのに、さも今気付いたかのように根岸は振舞った。友達なら、すぐに思い当たってもいいはずだ。恨まれるはずない、と言い切れるなら余計に。

反論されたのが癪に障ったのか、佐藤をからかっていた男子生徒、黒井は叫んだ。

「呪いに決まってるだろ！ 魚の血で描かれているのが証拠だ！」  
「あれは呪いじゃないわ」

黒井の台詞を小百合は打ち消した。立ち上がってきっぱりと言いつつ、小百合は大人しいながらも、確信させるのに十分な声音で言った。変に自信のある声はそれ以外の答えを否定させる効果があった。

黒井は何も言えなかった。それを確認してから、小百合は佐藤を見た。

「意図は呪いだったのかもしれない。だけど、あれじゃ意味がないわ。どちらかといえば、佐藤さんにとって良い結果になるものだったわね」

「何で…そう言えるの？」

「完璧じゃなかったから」

につこりと笑った小百合に、佐藤は安堵の溜息を吐いた。張り詰めていた気が緩んだような、肩に載っていた重りが下りたような表情だった。小百合の笑顔が言葉に力を与える。

僕が言わないのはその理由が大きい。人によって言葉が与える影響が違うのなら、適任の方が言えがいい。今の状況では僕の言葉に

は力がなかった。小百合だったからこそ、あの不吉な凶形の本当の意味がわかり、普段から注目されていることもあり、その言葉は素直に聞き入れられた。

「でも、『呪い』には違いがないってことよね？」

余計なことを。根岸は心配を装って佐藤に追い討ちをかけた。途端に佐藤の表情は固まり、顔色は青くなった。

小百合はやれやれ、と首を横に振り、根岸に鋭い視線を遣った。

「そうなるわ。でも佐藤さん、私はあなたにとって良い結果になるものだったと言ったわよ？ どちらを信じるかはあなたの自由」

話しは終わったとばかりに、小百合は椅子に座った。また教室が静まり返った。

三時間目の開始を知らせるチャイムが大きく響いた。

## 7・昼食（智哉作）

「智哉の手作り？」

昨日昼食の用意をしてくると言われたので、何も持ってきていなかった。昼食の時間になると、食堂に向かう生徒と同じ速さで小百合と智哉はこちらに向かってきた。智哉の手には、古風にも風呂敷に包まれた重箱が握られていた。

今は空いている前の席を反転させ、小百合は座った。智哉も重箱を机に載せ、隣にあった椅子を間に置いて座った。

「そう。今日は智哉が昼食当番よ」

「昼食当番？」

智哉は漆塗り風のプラスチックの皿を配り、それに合った箸も配った。その間に小百合は風呂敷を解き、三段の重箱を崩していつていた。

一段にはちらし寿司が入っていて、他の二つはおかずになっている。どれもお店に売っているようなもので、智哉の手作りというのが信じられなかった。

いや、信じるけど。

「交互に昼食を作ってきているんだよ。前まで毎日一人分を作ってきていたから、効率は良いよ」

智哉が手を合わせたのを合図に「いただきます」の声が重なった。小百合はそそくさと自分の小皿に分けていった。智哉も丁寧に自分の分を取っていつているのを確かめてから手を伸ばした。

とりあえず、好きな玉子焼きを小皿に取った。

「美味しい……」

口に入れてすぐに汁の風味が感じられた。咀嚼する度に口に出汁と卵の味が広がる。これは普通にお店に出せるんじゃないか。

思わず漏れた感想に、智哉は安心したような、ふっと緩んだ笑みを見せた。

「和食はやっぱり智哉ねー。ちなみに私は洋食が得意よ。由宇も昼食会に参加する？」

小百合は満足そうにいろいろな種類を少しずつ食べていた。きちんと全て飲み込んでから話している。二人の丁寧な箸を口に運ぶ所作や、食事中のマナーの良さは感嘆するものだった。僕は別に気にしないけど、おかずを取るときは箸を逆さにしている。容姿に加えてのこの礼儀正しさは賞賛に値する。まあ、僕も最低限の礼儀は弁えているけど。

昼食会に参加するということは、僕も順番に昼食を作ってくれればいいってことかな。でも、二人の料理の腕は確かのようにだし、僕が作ったもので良いのかが疑問だ。

「僕も料理作ってくればいいわけ？ 得意っていえるのは中華だけだ」

「作ってくれるの？」

驚いたように、そして期待するように声を揃えてこっちを見た二人の表情は小さい子供のようによく似たものだった。

口から苦笑が漏れた。僕が作るというのは意外だったようだ。話の流れからそれは当然だと思っていたけど、そうじゃなかったらしい。

そんなに期待されても困るんだけど。

「僕が作るので良ければ。じゃあ、明日作ってこようか？」

「是非！」

嬉々とした声は自然と重なった。仲が良いんだな、とそんな様子を見ていつも思う。いつから二人は仲良くなったのだろう。このクラスになってから、大体のグループは把握している。一学期の初めは二人に接点はなかったはずだ。それが、大した会話もなしに一緒にいるようになったようだった。

その中に何故僕を誘ったのか。二人が付き合っているのをカムフラージュするためか、と疑ってみても、そんな様子はなかった。

理由が欲しいけど、それを訊くのは憚れた。

「じゃあ、何か希望はある？」

「んー春巻きが食べたい。生でも揚げたものでもいいわ」

「御飯はチャーハンがいいな」

頷いてから顔を下に向けたまま、二人の希望に必要な材料を考えた。冷蔵庫にある物、帰りに買う物。弁当ということを考えると、冷めても食べられるような物。煮物を口に入れて噛みながら考えを纏めた。

ふと顔を上げると、じつとこっちを見ている二対の瞳に合った。これはちよつと。

照れるじゃないか。

「由宇に見返りなんて求めてないのにね」

「作ってくれるなら嬉しい限りだけど。明日が楽しみだよ」

自然と団欒な空気が漂っていた。昨日友達になっただけなのに、ずつと前からの付き合いのように感じる。それが僕だけでないのを祈るばかりだ。

このとき、周りから様々な感情が籠った視線が刺さるのを感じていた。羨む者、恨む者、妬む者、それは僕に向けてのものだった。わかっている。僕はこの中では異質だ。特に目立つことのない、普通の域を抜け出さない顔に、特別に頭が良いわけでも運動ができるわけでもない僕は、二人と並ぶことが変だった。協調性のない「す」繋がり三人、というだけの同じ位置付けをしないクラスメイトもいる。

でも、二人が必要とするなら別だ。二人が僕を友達と選らんだのに、僕がそんな理由で拒絶するのはおかしい。協調性のない「す」だけの繋がり、友達という関係になってもいいじゃないか。

その視線を無視し、僕は二人に笑顔を向けた。

## 8・悪意の連鎖

放課後はいつもと同じように訪れた。しかし、どこか不自然だった。

ストレスに耐え切れなくなったのか、佐藤は六時間目が始まる前に早退した。そして、僕に対して変な視線が付き纏っていた。別に気にしないけど。

「由宇、特別棟に寄ってから帰らない？」

小百合は荷物を入れた鞆を肩に掛け、帰る用意をして机の前に立った。智哉もリュックを背負って待っていた。一緒に帰るのは昨日からの習慣だ。

「いいよ。今日は帰りに荷物を運んでもらうことになるけど」

「それは予定の内」

こんなとき、智哉の素っ気無い返事が嬉しい。荷物持ちなんて嫌な顔をされるものの部類に入るのに。智哉と目が合ったので、笑顔で嬉しさを伝えた。

智哉はすつと視線を外し、小百合の方へと向いた。もしかしくても、智哉は僕の笑顔が嫌いなのだろうか。普通に話しているときはしっかりと目を見るのに、笑顔や表情を緩めると変な反応をする。それは小百合も同じだった。二人は僕の笑顔が嫌いだという結論に達してしまうのは仕方がない。

また機会があつたら訊いてみよう。嫌な気分させるのは僕だって嫌だ。

僕の準備が整い、クラスメイトの奇妙な視線を背に教室を出た。

「音楽室に教科書忘れちゃって」

小百合は音楽室のある特別棟へと繋がる渡り廊下を目指してすたすたと歩いた。背筋はきちんと伸び、自然と綺麗な歩き方をしているとところが小百合らしい。智哉は小百合のような上品さではないが、姿勢良く歩いている。後ろから見ていると見本のようで気持ち良か

った。

自信があるように見えるのは、背筋を伸ばしている影響が大きい。それに見合うものを持っているのだから、人の目を惹いて当然だろう。友達になって近くで見ると、それははつきりとわかった。

だから、一層自分とは遠い所にいるように感じた。

「由宇と智哉は書道だったわよね？ 由宇、書道が得意なの？」

渡り廊下を過ぎて特別棟の二階に入ったところで、小百合は顔だけ後ろを向いて話しかけてきた。二階には書道室がある。三階には美術室があり、目指す音楽室は四階だ。

「得意というより、好きなだけ。墨の匂いが好きで始めたんだけど」「謙遜だね。由宇は達筆だよ。真弓ちゃんと並んで、クラスでトップだから」

なんて褒め方するんだ。智哉は説明するように淡々と言ったが、それでも内容は僕を喜ばせるのに充分だった。得意と好きは違う。しかし、それに実力が伴っていて認められることは、僕にとって至福だった。

それが智哉になら、余計に嬉しい。顔が緩んでしまいそうになった。でも、僕の笑顔が嫌いなものかもしれないという懸念があるから笑顔は隠そう。

「ありがとう、智哉。君だって綺麗な字を書くけど」

智哉の真似をしてさらっと言ってみた。小百合はおや、という表情をして笑みに変え、智哉は意地悪そうな笑みを作った。

だからなんでそんなに素の表情を出すかな。僕は特別だって自惚れそうになるじゃないか。

「あー良いわよね、智哉は。私も書道にすれば良かった」

仲間外れの気分なのか、小百合は不満そうに顔を顰めて先に階段を昇って行った。智哉は自然と僕の隣にいて、小百合の拗ねている様子に仕方がない、というように苦笑した。僕もそうだな、という意味を込めて眉を上げた。この距離感は悪くない。二人の間は心地良かった。

特別棟に人は少なく、部活をしている生徒以外は見かけない。特別棟を使う部活は書道部と美術部と吹奏楽部で、書道部と美術部の活動している二階と三階は静かだった。しかし、四階に上がると吹奏楽部が練習している音が微かに聞こえた。音楽室は防音設備が整っているので、微かに漏れているのは隙間が空いているからだろう。小百合はゆつくりとドアを開けて中へ入って行った。

音楽室の隣には図書室がある。図書室の入り口には掲示板があり、そこには新刊や入荷した本の紹介が載っている。小百合を待つ間、その掲示板を見ていた。智哉も隣に立って同じようにしていた。

そのとき、近くから悲鳴が聞こえた。昨日と同じような恐怖の滲んだ女生徒の声。それは昨日の出来事を甦らせた。

声は図書室を過ぎた階段の方から聞こえた。

## 9・札

「智哉！」

智哉は頷き、先に走って行った。僕は小百合が来るのを待つてから後を追いかけた。小百合なら教室にいてもどこから声が聞こえたかわかるだろうが、一緒に行ったほうが確実だ。図書室を過ぎたところで足を止めた。

階段を下りたところに、根岸と真弓、そして智哉がいた。根岸は身体を震わせて廊下にしゃがんでいて、真弓は昨日と同じように根岸の肩に手を置いていた。昨日と同じ光景。その中で違っていたのは、根岸の周りに長方形の白い紙が散らばっていることだった。

智哉は落ちている紙を一枚取った。紙には何か書かれている。

「やっぱりね」

小百合は状況を理解したようで、階段を下りて行った。ここにいても仕方ないので、小百合に続いて階段を下りる。

「札だね」

「魔法陣の次は札。素人が手を出していい領域じゃないのに」

小百合は智哉から紙を受け取り、ちらりと見てから僕に差し出した。手に取ってみると、紙に書かれていたのは不思議な文字だった。神社で貰うお札に似ている。

「真弓くん、また第一発見者になったの？」

「真弓ならここにいるても不自然じゃない。図書室の常連だから」

そうね、と小百合は深く追求することはなく、周りに落ちている紙を拾っていった。智哉も同じように拾っていく。

真弓は僕を見て弱く笑い、すぐに視線を根岸に移した。横目で小百合と智哉を見ると、二人は根岸に関心はないようだった。

片膝を着いて、根岸の顔を覗きこんで見た。

「根岸、大丈夫？」

「……私は悪くない……」

一応声を掛けてみたが、応えはなかった。その代わりに、何度も悪くないと繰り返す声は狂気じみていた。ぶつぶつと洗脳するように、暗示をかけるように声は途切れることはない。

昨日の魔法陣は根岸がやったことだということはわかっていた。それは教室での会話で確信していた。では、今度は誰がやった？

小百合と智哉は紙について何かを話し合っていて、その内容は聞き取れなかった。聞いたところでは、思えないけど。

視線に気付いたのか、智哉は右手に持った紙を左手の人差し指で指した。

「また間違ってる」

「何かの本を写したみたいだけど、これは『呪い』の意味でさえない。間違っているけど、祈祷の一種よ」

たとえばそれが間違って祈祷の意味を持つものでも、相手の趣旨は『呪い』だろう。それがわかっていいるのか、根岸は小百合の言葉に反応しなかった。今日自分が言った「呪いには違いない」というのが自分の身にも起こったのだ。佐藤に言った言葉が跳ね返ってきて、一体どんな気持ちなのか察することはできない。

そんなもの、知りたくもない。

「嫌な感じだ」

「そう、嫌な流れよ。連鎖するわ。模倣は便乗できて、楽だから」小百合の意見に頷いた。そう、真似をするのは楽だ。前例があれば、悪い事をしているという自覚が薄れる。「誰かがやったから」。その魔法の言葉は錯覚を起こす。

なぜ、今になってこんなことになったのか。藤田先生の蒔いた種はどんなものだったのか。

「小百合、藤田先生の蒔いた種ってというのは何？」

## 10・無責任な言葉とその意味

「『今できることをやれ。今だからできることをやれ』。無責任な言葉よね。なんでも理由にできる」

小百合が吐き捨てるように言ったのに、根岸はびくっと大きく肩を震わせ、口を閉じた。思い当たる節があるのだろう。

今できること。高校二年の今できること。高校も二年目になって学校のしくみもわかってきた頃で、受験もまだ先だから一番余裕がある時期だ。そして一番不安定でもある。思春期で、人間関係にも悩む年頃だ。そんなときに『今だからできることをやれ』と言われれば、常日頃思っていることが当てはまるのは自然なことだ。

根岸の場合、それは『友達だが気に食わないところがある佐藤に悪戯をする』だったということなのか。

僕はその言葉をそのままの意味で受け取っていた。後悔しないように、夢に向かった今できることをやれ。それが、違う結論に辿り着くとは。

「良い意味は、同時に悪い意味も含むことがあるのよ。長所と短所なんて、紙一重、解釈の違いだしね」

「小さな親切大きなお世話、ということですか」

真弓は根岸の肩から手を離し、膝を伸ばして立った。もう根岸を支える必要がなくなった。根岸はさっきまでの動揺が嘘のように体の震えは止まり、下を向いて何かを考えているようだった。

根岸のことは放っておいても大丈夫だろう。自業自得だといってしまえばそれまでだが、もう助けが必要には見えなかった。

「そろそろかもね」

「そうだね」

二人の予測は何を示しているのかわからなかった。真弓もわからなかったように、首を少し傾げていた。その様子に肩を竦めて同意を表した。

やはり勘違いだったのか。二人にとって僕は特別なんで、なんて思っただろう。主語も述語もない、端的に何かを示す言葉が理解できない。意思の疎通ができていないのに、思い上がるのはこれまでだ。友達であることは変わらない。

真弓のいつもの優しい瞳に、少し泣きそうになった。

## 11・呪いと悪意

朝、教室に入ると、昨日のことはもう知れ渡っていた。僕が教室に着くのは一時間目が始まる十分前なので、生徒は大体来ている。佐藤はまだ一昨日のことを引き摺っているのか、姿が見えなかった。根岸も佐藤の二の轍を踏むのが嫌だったのか、空席になっていた。佐藤の様子を見ていれば、自分がどうなるのか容易に想像できる。当事者がいない中、話は盛り上がっていた。小百合は話に参加する気はないようで、本を読んでいた。その顔は俯いていたが、不機嫌そうな表情が見て取れた。智哉は小百合の横に立って様子を見ていた。

「真弓、お前また一番に着いたんだってな。お前がやったんじゃないのか？」

また黒井が無責任なことを言った。黒井も小百合同様影響力を持つ存在なので、その発言に周りの生徒は反応した。昨日は小百合の方が影響力が強かったため負けたが、今は違う。真弓に嫌な視線が集まっていた。

第一発見者が犯人なんて、笑えない。学校でそれをするのはメリツトよりデメリットの方が大きすぎる。今回事件が起こった場所は、どちらも特定するのに時間が掛からない場所だったのだから、その可能性はもっと低くなる。発見するのは他人の方が簡単だった。

その中で真弓は平然として、いつもと変わらない笑みを浮かべた。打たれ強い。また真弓は被害者で、何かを我慢している。

「真弓がするはずない」

思わず口から出た。言った本人が驚いているのだから、周りも驚くのは当然だった。真弓に向かっていていた視線は一気に僕に集まった。黒井はまた邪魔をされたのが気に障ったのか、こちらに向かって歩いてきた。

うわ、威嚇してるよ。でも本当のことだから仕方ないじゃないか。

「何でそんなことが言えるんだ？ 真弓は八方美人でいつも他人と線を引いているだろ。もしかしたら、偽善なのかもしれない。佐藤や根岸を嫌っていたかもしれないだろ！」

「偽善でもそれは優しさだ。そして、真弓はそんな卑怯なことではない。怖いわけ？ 犯人がわからないことが」

だから誰かを犯人にしたいのか、と言えば胸倉を掴まれた。いいね、その短絡的なところが。そんなことをすれば、不利になるのは黒井の方だ。殴られるのは覚悟の内だ。こんなときに凄まれても、恐怖なんて感じなかった。周りにいるクラスメイトは理不尽な黒井の行動に戸惑っているようだった。

そのとき、凜とした少し高い声を通り抜けた。

「初めに言い出した人が犯人、っていうのもあるよね」

黒井は声のした方へ顔を向けた。言った本人、智哉は小百合の横に立ったまま無表情で黒井を見た。智哉が教室で普通に話すのは珍しかった。小百合とはよく話しているようだったがその声は控えめで、はつきりと聞いた者は少ないだろう。

黒井は一瞬怯んだようだった。それが掴まれたところから伝わった。

「その手を早く離しなよね。そんなことしてると、本当に犯人だと思われるよ」

黒井は乱暴に手を払った。掴まれたところの皺を伸ばすために服を軽く払い、智哉を見た。黒井を責める瞳に出逢い一瞬迷ったが、お礼の意味を込めて薄く笑った。智哉は安心したのか、瞳の強さを少し緩めた。それでも鋭い視線を黒井に向けた。

真弓は自分を庇ったことで矛先が僕に向かったことを心配していたようで、黒井が離れてから急いで駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか？」

「平気。小百合、今回も解説を頼める？」

僕が攻撃対象になってからずっとこちらに視線を向けていた小百合は、やれやれと言った様子で立ち上がった。手には昨日拾った札

の一枚を持っていた。他の札はどれも同じで、処分してある。

「これは『祈り』を意味するもので、『呪い』の効果はないわ。書いてあるのも間違っているし。でも、相手の意思是『呪い』。昨日と同じね」

小百合の解説に教室にいる全員が耳を傾けていた。そう、また『呪い』だ。昨日は魔法陣で、今度は札。種類は違っているけど、どちらも第一印象は『呪い』を思わせるものだった。

黒井は何も言わなかった。小百合には弱いのだろうか。それにしても、大人し過ぎるような気がする。これは、なんとなくわかった。黒井は小百合のことが好きなのだ。そして、智哉に対しても素直に従ったところを見ると、小百合と一緒に行動する智哉も一目置かれているということだろう。突然その中に加わった僕を良く思わないのは仕方のないことだ。僕だって未だに何故一緒にいるのかわからない。

友達という理由だけが頼りだった。

「一つ言っておくと、『呪い』はそれ自体じゃなくて、その『言葉』が問題なんだ。『呪われている』と思うことが、心理負担になる。そのストレスが、『呪い』の効果として体に変調をきたすんだよ」

智哉の説は、納得させるものがあつた。現代では、ストレスがもたらす体への影響はよく知られている。胃腸が悪くなるのはその代表だ。自分が『呪われている』と思えば、体に異変が出て不思議ではない。ただの悪戯でやるには、相手の負担が大きすぎる。

それに手を出したのは、佐藤とあとは誰なんだ。

## 12・不自然な日常

「黒井、僕も同じなんだ。僕は怖い。悪意が感染しているようで、嫌なんだ」

「弱虫だな。でも、確かにこの流れは嫌な感じだ。卑怯なのが気に入らない」

僕に向かって嘲るように笑ったが、そのあと苦虫を潰したように舌打ちした。黒井は悪い人間ではなく、皆の代表として態度に出しているような感じがした。皆が思っていることを曝け出しているような、そんな明け透けな印象がある。だからこそ、支持される部分があるのだろう。

自分が誰にも影響を与えない、小さな人間に思えた。

「『怖い』と認めるのも勇氣よ。由宇はそれができるから好きよ」突然小百合がにこつと笑って言った「由宇」と「好き」に、クラスメイトは騒いだ。横目で黒井を見ると、悔しそうにしていた。

何で今言っかな。何か意図があるのはわかるけど。その好きは「友達」に対してなのに、恋愛としてのものだと思われる可能性が高い。

「僕も由宇のことは好きだよ。だから、一緒にいるんだ」智哉も加わった。これは二人の計画だと確信した。何かを煽っている。

それに顕著に反応した教室にいた生徒は沈黙して、僕に不躰な視線を向けた。

嫌だけど、だんだん慣れてきた。二人と友達になるのに、それくらい覚悟はしていた。

「何をしていますか。もうチャイムは鳴りましたよ」

担任の声が静けさを割った。女性特有の高い声ではなく、硬い声だった。真弓と同じ丁寧語なのに、使う人によってそれは全く違って聞こえた。

真弓の方が自然だった。

「また呪いの悪戯があったようです。魔法陣、札と続きましたが、真似しないでください。では、授業を始めます」

担任が教科書を教卓の上に広げたのを合図に、クラスメイト達は自分の席に戻っていった。教師には従順なクラスだった。反抗する者はこの場にいない。そういうグループは屋上でさぼっていることだろう。その方が賢い。教師相手に反抗しても体力の無駄遣いで、そんなことをするくらいなら大元から離れればいいだけのことだ。それは教師を馬鹿にしていることにもなるけど。

「では、今日は源氏物語に入ります」

硬い声に変化はなく、無機質な感じがして嫌だった。クラスの生徒が被害に遭っているのに、それを何事もなかったようにしている。悪戯で済ませないほどの悪質なものののに、他の教師も何も言わないのか。さつきから一つ引つ掛かっていることがある。何故二つの呪いの種類を言うのか。ただの『呪い』で充分なのに、特定する意味はどこにあるのか。

授業は自習していたらわかる内容なので、意識を外に飛ばした。ふと視線を感じて顔を上げると、同じように授業に集中していない小百合と目が合った。苦笑を返すと、小百合は困ったように笑った。やはりこの反応は変だ。智哉の方を見るとこちらを見ていたように視線が交わった。小百合同様苦笑をすると、智哉はあからさまに目を逸らした。

これは疑いようもなく、僕の笑顔は二人にとって見たくないものいうことがわかった。これから気をつけよう。変な顔になっているのかもしれない。

隣の席の真弓を見ると、僕の視線に気がついたのか、真弓がこちらを見た。試しに笑顔を作ると、真弓も笑みを返した。これが友達の普通の反応だろう。

小百合と智哉と本当に友達になったと思っているのは、僕だけなのか。『友達になりたい』と言ったのは向こうだけど、冗談だった

のかもしれない。名前で呼び合うのも、違ふ意味があつてのことなのか。

自問自答に最終的な答えはなかった。

### 13・昼食（由宇作）

「約束通り、作ってきたけど」

結局、疑念はそのままで昼を迎えた。昨日と同じ配置で座っている。中華料理ということだが、装丁は全く気にせずタッパーに入れて来た。

全部で三つの容器を袋から取り出すと、小百合と智哉は早速蓋を開けた。

「わー春巻きが両方ある」

「どっちでもいいって言ったから、どっちも作ってみた」

プラスチックの皿を二枚ずつ渡し、箸はそれぞれ持参で用意は整った。手を合わせての「いただきます」の声は自然と重なり、昨日と同じように昼食は始まった。

中華料理は弟が好きなので、和食を得意とする母に代わっていつも作っていた。週に一回のペースで作るため、腕は着実に上がっている。実は今日持ってきたのは昨日作ったものだった。四人家族なので、あと三人分を追加しても支障はない。

「うわー美味しい。生春巻きは勿論のことだけど、揚げた方も良いわ」

「チャーハンはあるかけにしたんだね。確かに、お弁当にするとご飯がベタつくからこっちの方がいいけど」

話しながらも口に運んでいく二人に、自然と笑みが零れた。自分が作ったものを喜んで食べてもらえれば本望だ。そのために弟の我が儘で作ってあげていると言っても過言ではない。

二人は僕の顔を見て、一瞬動きを止めた。動かしていた口と箸が静止した。

これは僕の笑顔のせいだ。

「あーもしかして、僕の笑顔は嫌い？」

「いや、そうじゃないの。笑っている顔が嫌いなんて、そうそう無

いもの。ただね」

小百合は言葉を濁した。笑顔を嫌だということではないことがわかったが、続く言葉が気になる。

もぐもぐと口を動かして沈黙した小百合は困った様子で、智哉に助けを求める視線を送った。智哉は口に残っていたのを飲み込んで、溜息を吐いた。

「君が笑うのは珍しいから、驚いただけ。嫌いじゃないよ、君の笑顔は」

「じゃあ、気にしないことにする」

そう宣言すると、二人は頷いた。嫌われていなかったという事実には安心した。なんとなくなくなった友達という関係が、今では失い難いものになっていた。一人でいるのは楽だけど、小百合と智哉なら一緒にいるのも悪くない。嫌な視線が付き纏うけど、そんなことは気にならない。

小学生時代の給食のように、会話のある昼食は穏やかに進んでいた。

## 14・今までの日常

「今日は用事があつて一緒に帰れないの。ごめんね」

「…ご苦労様」

両手を腰に当てて深く溜息を吐いた小百合に心底同情した。また担任から雑用を押し付けられたのだろう。優等生を演じているからやなくていいことまで任せられる。智哉も同様に机の上に紙の束を積んでいた。

「手伝おうか？」

「いや、いいよ。これだけが用事じゃないから」

他にも何かあるのか。手伝いを拒む理由は言いたくないようだったので、訊かないことにした。

前まで一人で帰っていたのに、今はそれが不自然になっていた。数日で大きく変わった環境。それは急激すぎたのかもしれない。

無意識に救いを求めていたのかもしれない。

「すっかり綺麗になつて…」

足は自然と最初の事件が起こった場所へと向かっていた。あの禍々しい赤は跡形もなく消えていた。血は消えにくいものだから、その労力に少し同情した。あんなことがあつた場所だけど、それでも僕にとつては安心できる場所だ。あの赤は、呪いではない。あれは智哉が言っていた、心理負担のための手段だ。この場所はまだ僕のものだ。誰もいないことが一層心を落ち着かせた。

いつもと同じように、溜め込んだモノを発散させるように大きく声を出した。放送部の発声練習にでも聞こえているのだろうか、と小百合が言っていた言葉が過ぎた。どんな風に聞こえるか試してみたいと思う。また機会が試してみよう。

久しぶりに出した声は思ったよりも伸びた。高音が自然と出る。

腹筋を鍛えて出した腹式呼吸の声は、無意識の内にアメージング・グレイスを紡いでいた。何度も歌った旋律が喉の奥を震わす。

何かを吹っ切るように歌っていた僕は、近くに人がいるなんて思いもしなかった。しかも、それが複数だったなんて。

でも、それはいつものことだと、後から真弓と小百合と智哉から聞いた。

## 15・魔女裁判

いつもの帰り道。いつもの光景。過ぎていく景色の中に人の姿は少ない。

駅を過ぎるとそこは工場や大きな会社が並んでいて、少し歩いたところに住宅街が広がっていた。駅付近は学校側が栄えていて、有名なデパートやアーケード街がある。人気のない道は、あと五分ほど続く。

建物が並んでいるため、死角は多い。突然人が現れたように見えたのは、角から出てきたからだった。現れたのは、クラスメイトの志水だった。

「何か用？」

「お前さえいなければ、二人は調和していたんだ。なんでお前があの二人と一緒にいるんだ！」

小百合か智哉の信望者か。確かに二人は並んでいるとお似合いだった。それをうつとりと見ている奴がいるのは知っていた。害はないようだったので放っておいたが、それがこんな形で影響するとは思わなかった。

志水が怒るのもわかる。僕が入れば二人の関係は可笑しくなる。それは表面上だけのことだが、表面しか見ていない信望者には言っても無駄だった。志水は名前順が智哉の前に位置するため、その思いは強いのだと察する。

「それは友達になろうって言われたから」

「あの人たちが？ 冗談だろう。真に受けたのか？」

鼻で笑われた。二人が僕なんかを相手にしないと知っていることがその蔑んだ目から痛いほどわかった。

僕だってそう思ったことはある。何故、という疑問は常にあった。でも二人と一緒にいると、そんなことは考えられなくなっていた。二人は僕を認めている。

「僕は小百合と智哉の言葉を信じる」

「名前で呼ぶな！ お前が呼んでいい名前じゃない！ わからないんだったら、わからせてやるしかないな」

志水は学生服のポケットから折りたたみ式のナイフを取り出した。刃が怪しく光る。魔法陣事件があったときの帰り道、小百合が言っていたことを思い出した。西洋での魔女識別方法として、火やナイフがあつたそうだ。火に手を入れて火傷をしたら魔女、ナイフで身体を刺して、刺されば魔女。悪しき者が傷付く識別方法だったらしいが、そんなもの普通の人をやつたら火傷もするしナイフは刺さる。聖火なんて、結局はただの火だ。

その魔女識別方法が、今自分を試すために行われる。

「今しかできないことをやる。僕のアイデンティティーを守るために」

どこかで聞いた言葉だった。向かってくる刃を見て思い出した。

それは藤田先生の言った種の中にあつたものだ。そう考えている間にも、刃は確実に僕に向かつていた。どこを刺すつもりだろう、とぼんやり考えていると、背後から人影が過ぎった。

長い髪がふっと頬に当たった。

「小百合」

僕の前に立つて志水と対峙したのは小百合だった。不思議と一瞬で人物の正体がわかった。

志水は小百合の登場に驚いたようだったが、勢いのついたナイフの動きは止められなかった。刃は小百合に向かう。

小百合は自ら前に進んでいった。後ろからはよくわからなかったが、刃を瞬時にかわしたようだった。体を少し傾け、翻りながら志水の腕を掴んでナイフを叩き落した。ナイフが地面に当たって硬質な音がした。

「それはアイデンティティーじゃなくて、エゴよ」

小百合は志水の横に立って、冷たく言い放った。美人が怒ると通常よりも何倍も怖いというのは本当だった。志水は近くでその小百

合を見ているため、その怖さは僕よりも大きいだろう。

智哉も僕の背後から現れ、地面に落ちたナイフを拾った。

「正しいことをした君なら、このナイフは刺さらないんだよね？」

智哉はくすぐすと楽しそうに笑った。ナイフをくるくると器用に回している。

二人とも、本当に怖いんですけど。

「もう、止めたら。もうどうでも良くなった」

「優しい由宇に免じて、これくらいで許してあげるわ」

「そうだね」

小百合はふつと気を緩めて笑い、智哉は息を吐いた。ナイフは折りたたんで放物線を描いて志水に投げた。志水はそれに反応できずに、ナイフは地面に落ちた。

歩み寄ってくる小百合に、僕は手を伸ばした。小百合は意味がわからないようで、首を傾げた。

あ、何か可愛いかもしれない。これが信望者が付く所以か。

「有難う、小百合。助かった」

感謝に意図するところを理解したのか、小百合は僕の手を取った。女性特有の柔らかい手。それは優しく重なり合った。これなら恋でも芽生えそうだった。でも、それはない。僕の中で小百合は友達的位置に確固としている。

穏やかな空気が流れる中、智哉は足早に近寄ってきて、手刀で握手を断ち切った。

「…小百合」

「良いじゃない。今回働いたのは私なんだから」

また二人でわかりあっている。智哉のこの行動は、嫉妬からきたものなのは間違いない。

やはり、二人は付き合っているのか。それとも、片思いの両思い状態なのか。なんか、微笑ましい。こういうじゃれ合いを見ていると、無意識に表情が緩んでいた。言い合っていた二人は、僕の顔を見て困ったように笑った。

「さて、そろそろ終わりにしましょうか」

小百合は面倒臭そうに首の後ろに手を掛けた。智哉も同意を示して腕を組んで頷いた。

何が始まって、何が終わるのか。二人は知っていた。

## 16・探偵役：小百合

次の日は土曜だったが、午前中は模試のため登校していた。佐藤も根岸も来ていた。進学のため、模試を放棄する気はなかったのだろう。全ての教科が終わった今、ホームルームを残すのみだ。しかし、それはまだ始まっていない。小百合がいなかった。

「諏訪さんはどこに行きましたか？」

「すぐに戻ってきます」

智哉は即答した。担任はそれ以上何も言わず、待つ姿勢を取った。クラスメイトも智哉の答えを素直に受け止めていた。説得力があるのには違いない。

智哉も言葉通り、小百合は一分もしない内に戻ってきた。堂々と前のドアからの登場だった。そして後ろに藤田先生を引き連れていた。

何をやるうとしているんだ。

「諏訪さん：藤田先生はどうしてここに？」

「諏訪に呼ばれたんだ」

状況がわかっていない教師二人は小百合に答えを求めた。小百合はにっこりと笑って藤田先生を担任の横へと導いた。

そして、後ろ手でドアを閉めた。教室は完全に閉ざされた。

「もう面倒なんで、終わらせたいんです」

「何を終わらせるのですか？」

担任の素朴な疑問は、黒板にチョークが当たる音に消えた。小百合は黙々と黒板に何かを描いている。それはあの魔法陣だった。小百合が黒板に向かっていている間に、智哉は小百合の横に立った。静かに教壇へと進む智哉に気付いた生徒はいないようだった。僕も全然気が付かなかった。教師二人は小百合たちが何をしたいのかが理解できないようで、じっと見ているだけだった。それが描き終わると次に智哉が札に書かれていた不思議な文字を書いた。描き終わった

のか、チヨークを溝に置いて二人は振り返った。

二つを並べると、それは『呪い』の印象しか持たなかった。

「初めは魔法陣。これは『呪術』の一種よ。でも、ここが間違っている」

カツカツ、と人差し指の第二関節で示した。何が間違っているのかわからない。

大半が理解できていない中、小百合は淡々と説明した。

「わからなくていいの。ただ、呪いは間違うと呪った本人に戻ってくるの。『人を呪わば穴二つ』とはよく言ったものね。まあ、呪いの本質は『言葉』なんだけど」

それは前に智哉が言ったことだ。「呪われている」ということが、何らかの効果として表れる。

呪いが返ってくるということなら、佐藤に対して行った間違った呪術は本人に戻るということになる。確かにその犯人の根岸は札によつて呪われた。

何か、話が上手く行き過ぎていないか？ それに、返ってきた呪いの形が違っている。

「根岸は呪いが返ってくることを知らなかったんじゃないのか？」

小百合に集まっていた視線が一斉に僕の方へと向いた。当然の疑問だろう。良く出来ました、とばかりに小百合は笑い、黒板を軽く叩いて注目を集めた。

「札の犯人が、それを知っていたのよ。それを利用したとも言える。魔法陣を根岸さんが描いたのは、わかる人にはわかったはずよ。札も間違っていたんだけど、これはただ嫌な流れを作ろうとしただけだから構わないの。この呪いは、根岸さんに影響すればそれで良かったから」

小百合によつて、この一連の事件が解かれていく。佐藤と根岸は呪いの仕組みがわかり、安心したようだった。この中で、不自然に緊張しているのは犯人だけだ。

犯人だけのはずなのに、何故複数いるんだ？

「そこで、早く終わらせたかったから、私は種を蒔いたの」

## 17・言葉の真意

小百合が蒔いた種。あの子の小百合の発言を思い返すと、それはつきりとわかった。あの子に何故言ったのかわからなかったが、今ならわかる。

「『由宇が好き』。僕のことを庇ったときか」

「正解。そしてそれは上手くいったわ。昨日由宇を襲った犯人が、札の犯人でもある」

小百合は糾弾するように、志水を指差した。皆の視線は志水に集まった。志水は顔を下に向け、微かに震えていた。少し可哀想だったが、やったことを考えればこれくらいは仕方ないだろう。

「私と智哉の中に由宇が入ったことを良く思わない人がいるのは知っていたわ。だから、良い機会だと思って利用させてもらったの」

だから、誘き寄せるために僕を一人で帰らせたのか。あんなに良いタイミングで現れたところを見れば、ずっと後ろをつけていたのだろう。用意周到だ。しかし、二人は僕に嘘は吐いていない。あの紙の束は本当だと不思議と確信できた。どちらかが僕の後をつけて一人で処理するなんて流石とも言うべきか。

最後の犯人を指摘してこれで終わりだと思った。しかし、小百合は終幕を宣言していない。

「ここで余談だけど、由宇を私と智哉と同じ位置に見ている人もいるのよ。佐藤さん、あなたもそうよね？」

佐藤は突然呼ばれて驚いていたが、すぐに頷いた。小百合が理由を無言で促すのに気付いたのか、戸惑いながらもはつきりと口を開いた。

「須賀くん、歌が上手いから。あの最初の事件の場所で歌っているのを聞いたの」

恥ずかしい。認められているのは嬉しかったが、それでも恥ずかしさが上回った。あのストレス発散の行動が、小百合と智哉の位置

にまで押し上げていたとは。歌の上手さなんて自分ではわからない。どんな声なのかわからないし、比較がなければ評価なんてできない。あのとき、小百合と真弓が僕ならわからないかも、と言った理由がやっとわかった。余談、ということから僕のために小百合は話したのだろう。優しい声は、一瞬にして切り替わった。何者も寄せ付けない、冷たい声が教室に通る。

「さて、根岸さんと志水くんの仕業だということはわかったわね。じゃあ、何故今になってこんなことをしたのか。何が原因になったのか」

何故今になって。今だから？ 今だからやったのか。その言葉は何度か聞いたことがあった。

今できることをやれ。それを根岸と志水は大義名分のように言っていないかったか。では、それを初めに言ったのは。

「先生方ですよ。この騒ぎを引き起こしたのは」

小百合は疑問形ではなく言い切った。その強い口調に、教師二人は明らかに動揺した。さきほど志水と同じく不自然に緊張していたのはこの二人だった。騒ぎを引き起こした張本人だから、あんな反応をしたのか。

藤田先生が種を蒔いた。小百合は確かにそう言っていた。そういう意味だったのか。

「何を言っているんだ。俺が何をしたっていうんだ」

「『今だからできることをやれ。自分のアイデンティティーを守れ』。これだけ聞くと、綺麗なものですよね。でも、それは裏を返せば正当化の言い訳です。悪いことをする後押しになる」

藤田先生の語気の強い声を飄々とかわし、小百合は調子を変えずに淡々と述べた。その反論に、藤田先生は口を噤んだ。それは意図して言ったことを肯定することになった。

あの言葉に深い意味はないと思っていた。だから、引つ掛かることがなかった。しかし、精神が不安定な人が聞けば、それは呪文のように聞こえるだろう。その効果は根岸と志水で嫌というほどわか

った。そして、それを煽ったのは担任の朝の報告だ。曖昧に情報を流して不安を誘う。邪心のあるものはそれに乗っかろうとする。今だからこそわかる、全ての意味ある行動。

何故、この教師二人はそんなことをしたんだ。

## 18・正当化の自己満足

「何故こんなことをしたんですか？ 佐藤と真弓を犠牲にして。教師であるのにもかかわらず」

「あなたは本当に私を教師と認めているのですか？ いつも馬鹿にしていたのに、そんなことが言えるのですか？」

僕の問いに、担任は冷静に答えた。声はいつもより硬かった。生徒が教師を馬鹿にした。それに対しての行動がこれというわけか。頭が痛くなってきた。正当化することに慣れている人ばかりだ。佐藤のことはわからないが、関係ない真弓を巻き込んで、何を正当化できるのか。

自分が正しいなんて、それは主観じゃ駄目だ。客観的な評価じゃないと、それはただの自己満足だ。

「それは自己満足だ……」

「そうだね。由宇の言うとおり、皆正当化の自己満足だよ。僕は誰も馬鹿になんてしない。そして、誰も利用しようとは思わない」

ふと漏れた呟きに智哉は同意した。それに救われた。偽善だと思われてもいい。ただ一人でも味方がいればそれで良かった。僕は担任も、藤田先生も馬鹿になんてしていない。客観と主観が同じだなんて、そんなことばかりじゃない。態度が全て内心を表しているわけじゃないのに。

今回小百合と智哉が利用しようとしたのは、状況だ。人を利用してはいない。その差は大きい。生徒を利用した教師。それで起こったことを利用した小百合と智哉。結局二人はいつかは起こることを早めただけで、それは相手をも救っていた。

何が正しいかなんて、明確な答えなんてない。ただ、悪いことだけは嫌でも浮き彫りになる。

もうこの場にいたくなかった。こんな空気の中で、正常な思考が保てるとは思わなかった。段々と混乱しているのが自分でもわかる。

人がこんなにも汚いものだとは思いたくなかった。負の感情が悪を呼ぶ。皆が皆そうだと思いそうになる。そして、自分をも疑いそうになる。

「ただ僕は、藤田先生の言葉を励ましたと思いたい。小百合と智哉の友達でいたい。自分が傷付いたからって人を傷つけて良いはずがないんだ。月曜にはちゃんと学校に来ますから、もう帰ってもいいですか？」

口から心の声が漏れた。声は擦れていて感情が籠っていないかった。叫びたい衝動が身体を支配しそうになるが、ここでそれをしては何も伝わらないだろう。それくらいの予想はつく。脈絡のない言葉が続き、最後は担任に向けて言った。情けない顔をしているだろう。自分では確かめられないが、担任の無言の頷きがそれを肯定した。

誰も何も言わなかった。真弓が心配そうに見ているのに、力無い笑みを返した。もう、疲れた。それが伝わったようで、夏目は労わるような笑みを浮かべた。

小百合と智哉は無表情で見ている。

後は任せたと顎を引くと、小百合は微妙な笑みを浮かべ、智哉は眉を寄せた。

教室のドアを閉めるとき、背後から小百合の声が聞こえた。

「信頼を裏切る。その結果がわかりましたか？」

## 19．そして3人になった

涙が出るかな、と思った。でも出たのは溜息だけだった。人の悪意を目の当たりにするとそれが他人に向かつてのものであるとしても苦しくなる。自分に問題があるのではないかと、自分を責める。

いつもの逃げ場である家の近くの公園は、休日を楽しむ親子で賑わっていた。それに少し救われる。ベンチに座って頂垂れていると、地面に影が差した。

「有難う。小百合、智哉」

「どういたしまして。由宇、大丈夫？」

小百合の声は優しくかった。思わず縋りたくなる。しかし、それはできなかった。それは本当の逃げになる。そんなことで二人を必要としなくなかった。

顔を上げると、僕を心配する二対の瞳に出逢った。その瞳にふつと気が抜けた。知らない内に気が張っていたようだ。

「もう大丈夫。君たちがいて良かった」

ちゃんと穏やかな笑みを作れたはずだ。だって、こんなにも気持ち穏やかなのだから。その証拠に小百合は嬉しそうに笑い、智哉は照れたように口元を緩めた。

僕が教室を出てここに来てから数分しか経っていないけど、小百合はどうやって終わらせたのか気になった。收拾はついたのだろうか。

それを察したのか、小百合は笑顔のまま言った。

「先生たちは全てを認めて謝ったわ。そして皆はなんとか気持ちに決着をつけたみたい。すぐに解散したわ。由宇の言葉が導いた結果よ」

それは買いかぶりだ。僕は逃げた。あの場から逃げても何も変わらないのに、あの場にいるのは耐えられなかった。

もっと感情をぶつけていれば楽になれたのかと思ってみても、そ

れは混乱を招く恐れもあった。これは黒井の言う弱さだ。

「由宇は優しいから辛いんだよ。それに比べて僕たちはそこまで優しくなれないから、ある程度のところで諦めがつくんだ」

智哉の柔らかい声に、思わず手を伸ばしてしまった。それは自覚して引つ込める前に智哉に捕らえられた。手から伝わる優しい温度。もう、無理をする必要なんてない。そう、心から思えた。

前に智哉がやったように、小百合は繋いだ手を切り離すつもりはないようだった。

「あの花卉の意味、わかった？」

小百合から何の前振りもなく発せられた問いに、思い当たるものは一つしかなかった。僕を囲むように一面に散りばめられた赤い花卉。あの禍々しさは、今回の出来事を表すのにぴったりだった。

未来を確信していた小百合からのヒントということだろうか。

「意味があつたんだ？」

「まあね。花卉を片付けるの、大変だったでしょ？ 出すのは簡単で、消すのは難しい」

「…そうだね。言葉は発してしまうとなかったことにはできない。そして、悪意を消すのは難しい」

思い出したくなかった。あの悪意に満ちた空間。濃密な日々が続いたのが、知らない内にかなりの負担になっていたようだ。赤が目にはちらつく。そういうえば、あの花の量は異常だった。花束が作れる程の花を何処から手に入れたのだろう。

買ったとは考えにくい。すると、考えられるのはただ一つ。

「あの花は誰から貰った？」

「やっぱり貰い物ってわかるわよね。あれは自称ファンクラブ会員から。ちなみに薔薇よ」

「貰い物をばら撒いたんだ…」

小百合はただ笑みを浮かべただけだった。酷いことをする、と思つてみても、気持ちの押し付けに丁寧な対応をする必要性はなかった。最後にはゴミ箱行きになった花卉。それに込められていたもの

は何なのか。善意なのか悪意なのか。

悪意を発散させる方法なんてあるのだろうか。

「そういえば、なんで由宇はよく放課後、教室で寝ているのさ？」

少しは気になっていたということかな。智哉の疑問はあるとき言われなくて不安になったものだった。気にしていてくれたということ、今は嬉しかった。

「解放、かな。この自由を縛る学校、教室で寝るという行為は反則だよ。だからこそ、その反則行為で身体の中に溜め込んだ悪意が発散される気がするんだ」

「授業中に寝るなんてことができないから、ね。由宇らしいわ」

そう、授業中に寝ることなんてできるはずがない。それを見た教師に悪意が湧くのは自然のことだ。今回の事件の教師を見ていたらそれはわかる。その悪意を受けるくらいなら、眠気を我慢する方が楽だ。

今回のことは教師二人が起こしたことだが、最後の事件は普通ならなかったものだ。友達にさえならなければ。そこまでして僕を引き入れた理由が、本当に恋人のカムフラージュということだけなのか。

「君たちって付き合ってるんだよね？」

## 20・小百合と智哉

「…何言ってるのさ」

智哉が呆れたように顔を顰めた。かなりの外れな答えだったらしい。じゃあ、リスクに見合うものは何なんだ。

「もしかして、私たちが付き合っているのをカムフラージュするために由宇を引き入れたと思ってたの？」

「そう」

あからさまに失敗した、という顔をした小百合は智哉を見た。智哉は小百合の言いたいことがわかったのか、ただ頷いただけだった。何が二人の間でわかったんだ？

今までの状況だと、それ以外の結論は導けない。

「これも良い機会かもしれないわね。由宇、ちゃんと聞いてね」

小百合が真剣な表情に変えたのを合図に、智哉は繋いでいた手を離した。今までずっと手を繋いでいたのに気が付かなかった。それほど自然になっていた。温もりがなくなり、手持ち無沙汰になった手を握ったり開いたりして紛らわせた。

「私は由宇が好きなの」

「僕は由宇が好きだよ」

続けてされた告白に、思考が固まった。その台詞は前に聞いたことがあったが、それとは違うことはわかる。

僕が何かを言わない限り、嫌な沈黙は続く。周りの明るい声が遠くに聞こえた。何を言えいいのかわからず、とりあえず確かめた。「それって、恋愛感情ってこと？」

二人は揃って頷いた。偏見ではないが、智哉が僕を好きというのに戸惑った。小百合が僕のことを好きだというのも、充分に混乱するものだったが。

「僕とキスしたい、そういう好き？」

また二人は揃って頷いた。

友情さえ疑ったのに、それが本当は恋愛感情だったなんて。信じるけど、実感できない。でも、今までの二人の行動に説明がついた。僕の笑顔に変な反応をしたのは照れ隠しで、今回の事件を利用して僕を仲間に引き入れたのは一緒にいるきっかけを作るため。そんな特別な理由があるなんて、思いもしなかった。裏付けの行動は、その気持ちが本当であること以外は示していない。

でも、今は答えを返せなかった。

「悪いんだけど、今返事はできない。まずはお友達から、ということとで」

「うん、わかってるわ。だから、友達から始めたのよ」

智哉も頷くのを見て、ほっとした。答えを延ばしただけで、何も変わっていない。しかし、新しい何かが始まるような気がした。まずは友達から。ゆっくりと知っていこう。今は二人が僕のどこを好きになったのかわからないけど、それも追々わかるはずだ。

あの赤に沈んだときから、未来予想図は描かれていた。

「『愛の告白』。初めからしていたんだけどね」

赤い薔薇の花言葉は『愛の告白』。なんだ、二人の気持ちはもう表されていたのか。それも、貰い物の花での告白。鮮やかな赤は禍々しさを感じたが、それ以外にただ純粹に綺麗に見えた。

僕の気の抜けた笑みに、二人は偽らない笑顔を返した。

## エピローグ：数日後

紅に沈んだ言葉は、蒼く染まって歌になった。<sup>あか</sup>

「二人は『あの事件』を利用したんですか？」

夏目が加わって四人になった昼食会で、夏目は世間話をする調子で切り出した。

『あの事件』とは、先週起きた通称『呪い事件』のことだと察しがつく。

責めるわけではない確認するだけの質問だったので、小百合作のオムライスを食べながら二人の返事を待った。僕も気にはなっていたことだ。

「『事件』をきっかけにはしたよ」

「由宇と夏目くんを巻き込むつもりはなかったの。ただ関わってほしかっただけ」

二人は平然と振る舞っていたが、スプーンを握る手が白かった。手に力を入れすぎている。

悔やむことないのに。小百合と智哉は悪くない。あの事件に巻き込まれたからこそ、今こうしていられた。

「もう、由宇が傷付くのは嫌だったの」

「そうやって絆を作ろうなんて思ってたのに」

傷付いて強まる絆。それは、あの事件に似ていた。

去年の四月、入学式から始まり文化祭で終わった、あの事件。僕が『万屋』という部活に入ったことによって生じた不和がきっかけだった。自分のために人を傷つけることを躊躇わない。正当化した自己満足を理由にする。『みんなも思っていること』で正義を主張する。

今回の『呪い事件』はあの『万屋事件』に似すぎていた。

「『万屋事件』と同じにしたくなかったってこと？」

「そつだよ。君は悪くないのに、君が一番傷つく」

智哉の Spoon を握る手が、一層白くなった。傷ついているのは誰なのか。僕だけじゃなかったのは確かだ。

去年は万屋の先輩たちが、今回は智哉たちが。

「仲良くなりたかったっていう理由が始まりなら、それでいいんじゃない？」

『万屋事件』と違って、今回の事件は営利性がなかった。『万屋事件』で僕はスケープゴートで、ただ万屋の中で狙いやすかったという理由だけだった。

今回の引き金は『アイデンティティ』という理由にならない言い訳で。

「今回の事件がなくても、このメンバーでいるためには何かが起こったと思うし」

「それでも、由宇が傷つく理由にはなりませんよね」

夏目のため息に苦笑した。

あの事件を利用しようときっかけにしようと、今幸せならそれで良い。ただ、そう思う。

紅から始まった繋がりが、今では。ふと、歌詞が頭を過ぎった。

「『蒼い物語』って知ってる？」

話題転換を試みた。これで有耶無耶になるわけではない。智哉も小百合も夏目も、そんなに単純じゃない。

話題転換は、ちゃんと今の話に繋がるようになってる。

「佐倉七海の新曲の？」

「そう。『佐倉七海』、本名『名波咲良』<sup>ななみさくら</sup>は中学からの友達なんだ。中学で唯一の友達、親友だよ」

誰かに中学の話するのは初めてだった。咲良の話は簡単にできるものじゃない。『芸能人』と『友達』というのは利用価値になる。そんなことで咲良との仲を壊したくないし、どちらも不快になるのは嫌だった。

でも、この三人なら。思ったとおり、特に『佐倉七海』に反応し

なかった。

「咲良の話はまた今度するとして。僕の歌声が好きだっていう咲良のためにレコーディングの手伝いとかしてるんだけどね。今回の新曲は咲良が作詞したのは知ってる？」

それは話題になっていいるため、知っていて当然かもしれない。三人が頷いたのを見て、話を続けた。

「あの歌詞は、今回の事件を基にしてるんだ。僕が話した内容を、僕と咲良との出逢いを絡ませて表現したらしいよ」

三人の驚いた顔に、思わず笑みが漏れた。

気持ちにはわかる。咲良からそのことを聞いたとき、僕も同じ顔をしていただろう。

あの歌詞が。まさか僕を示していたなんて。

「確か始まりは『瞼に触れた花弁は唇のようで、僕は紅の花弁に沈んだ』だったわよね？」

「うん。それは始まりだったよね。小百合と智哉と友達になった日から、始まった」

あの花卉の中で、僕たちは始まった。

「次は『意図と糸が絡み合い、僕は試されていた』だよ」

「そう。あの悪意の連鎖は、まるで僕を試しているかのようだった」

『呪い』という形の悪意は連鎖した。それは意図、自我を守るという理由で、人を傷つけていた。最後に僕も対象になり、あれは。

試されていたと表現しても間違っていない。

「『そのすべては今ある幸せのため、たどり着くための条件』、でしたよね」

「正解。みんなよく覚えてたね。その続きは『紅い言葉は告白、それは始まりの合図。今では蒼く染まり、澄んだ空に溶けた。出逢えたのは運命だと、そう思える君との奇跡の軌跡』」

静まり返った教室に声が響いた。いつの間に静かになっていたのか。歌い慣れた曲であったこともあり、歌詞を単純に読み上げることができず歌ってしまった。

「久しぶりに聴いたね、須賀くんの歌」

「去年の文化祭以来だよー」

近くにいた女子グループに拍手された。なんか照れる。家族や友人以外がいるところで歌うのは久しぶりだった。確かに去年の文化祭でステージの上で歌ったが、恥ずかしいのは変わらない。

パチパチと、クラスメイトの半数が拍手していた。

「…ありがとう」

一応礼を言くと、好意的なクラスメイトは笑顔で手を振り、雑談を再開した。

一部の好意的じゃないクラスメイトは睨んでいた。別に目立ちたくてやったわけじゃないんだけど。

「で、これが咲良が感じた『今回の事件』。僕も咲良と同意見だよ。誰も後悔しなくていい。全ては今の幸せのための軌跡だと思えるから」

あのときこうしていたら。その仮定は無意味だ。もし、なんてない。今が絶対で、確定している。

「二番の歌詞は僕と咲良の出会いだから、それはまた今度」

「紅から始まって蒼になったから、『蒼い物語』ですね。今では『あの事件』がきっかけで良かったと思います」

夏目の笑顔に、智哉と小百合は笑みを返した。

紅に沈んだ言葉は蒼い歌になり、僕たちは幸せになった。

『呪い事件』の本当の終結が二年後だとは、このときわかるはずもなかった。

## エピソード：数日後（後書き）

二年後は『最後の最後に逢う運命』で、『万屋事件』は一年前の『さよならの言葉』の事件のことです。名波咲良と由宇の出会いについては『言葉の欠片を集めて』で公開しています。

## もう一つの世界に続く話（前書き）

この話にもう一つ要素が加わった話のダイジェストです。<sup>パラレル</sup>『さよならの言葉』の一宮学人が出てきます。

## もう一つの世界に続く話

もう一つのパラレル世界。それは

「もしも」の話で、案外真実はこつちだったりするのかも。

「『障害と劣等感』は似ている」。『今できることをやれ』。それがきつかけよ」

小百合の言葉が耳に残った。それは数時間前に聞いた台詞だった。二つは負の要素としては同じだけど、障害と劣等感とは全く違うものだ。似ていない。

今できることをやるとしたら、周りに迷惑をかけない程度にするべきだ。周りに迷惑かけられるなら、それはただの自己満足で。

言葉が都合良く解釈されていく。理由にできないのに、自信満々で理由だと言う。悪循環が、広がる。

「二年前に俺たちが鎮静化させた事件が再発している」

学人先輩の介入が、事件を一つにまとめた。

一年前に廃部になった部活、環境整備部。通称『万屋』は、まだ強い影響を持っていた。まだ続いている、先輩たちへの尊敬。まだ終わらない、僕への羨望と憎悪。「なんでみんな認められないんだろっな」

「努力したくないからです。だから、努力して成功した人を見たくないんです」

僕を認めている先生と先輩。周りからは隠れた努力は卑怯だと言われ、努力で身についたものは嫌がられた。

認めてほしいなんて思っていない。認めてくれた人がいればそれでいい。努力は自己満足だけど、誰にも迷惑をかけていない。

全部初めから持っていなければならぬなら、才能しか認められないということになる。そんな価値観、いつまでも通用すると思っているのか。

「その結果がこれです」

最後は何も変わらない結末だった。

## もう一つの世界に続く話（後書き）

この話は後日投稿します。

## おまけ（名波咲良と）

「初めまして、名波咲良です」

爽やかな笑顔に、三人は同じ笑顔で返した。

「うわ、嘘臭い……」

思わず呟いたのに対し、それぞれ違う反応を示した。

小百合はうふふと含み笑いに变え、智哉は無表情に戻った。夏目は苦笑し、咲良は楽しそうに笑った。

「さっすが由宇の友達。人気アイドル『佐倉七海』を目の前にしてこの反応。ちよつと傷付くなー」

「キヤー佐倉七海！ サインしてー！ って言えば良かった？」

「それは勘弁。諏訪小百合さん？」

咲良は手を差し出し、小百合は力強く握手に応えた。

この二人は似ているかもしれない。自分の容姿を自覚して、それに対する評価を知っている。そして、時と場合によって性格を演じ分けることができる。

同じタイミングで手を放し、パンツと手を合わせて離れた。

「前からファンでした、とか」

「それは冗談？ それとも本気？ 周防智哉くん？」

「冗談半分本気半分」

咲良は智哉と軽く握手し、僕の隣に立って様子を見ていた夏目の前に移動した。

「初めまして。よろしくお願いします」

「こちらこそ。真弓夏目くん」

お辞儀をした夏目に、同じようにお辞儀で返した咲良はにっこりと笑った。

作り物ではない笑顔と行動に、咲良が小百合たちを気に入ったことがわかった。

中学の友達が、新しく高校でできた友達と仲良くなる。単純に嬉しかった。こうやって、人が繋がっていけば良い。

まあ、友達の友達が必ずしも良い縁だとは限らないけど。

「あとは幼稚園からの幼馴染み二人を紹介したら、僕の友達は全部繋がるな」

「あ、亜理沙なら会った。じゃああと一人だな」

そういえば、ドラマで共演したと言ってたような気がする。何の話をしたか詳しく聞かなかったけど、仲良くなったのは確かだ。

咲良が亜理沙と仲良くなったなら、きっともう一人とも仲良くなる。

小百合たちも、きっと。

「人の好みが似ているのかもしれない」

「由宇が好きだっていう前提があるからじゃないの」

智哉が溜息まじりに言ったことに、小百合と咲良は頷いた。夏目は苦笑している。

僕を好きだと言ってくれる数少ない友人たち。数少ないからこそ、大切にできる。数少ないからこそ、本物の好意だと思える。

いつもの無表情から、自然と笑みが浮かんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8879c/>

---

紅に沈んだ言葉

2010年10月8日15時05分発行